

2013 年度修了

レジリエンスの捉え直し

—大阪・釜ヶ崎から—

立命館大学大学院

応用人間科学研究科

臨床心理学領域

栗原 希

レジリエンスは、困難な状況の中を生き抜いていく力として 2011 年の東日本大震災後もしばしば引き合いに出された概念である。学問の域を越えて注目を集めている一方、実際は人によって定義が異なり、言葉がひとり歩きしているのが現状だ。近年、レジリエンスを単なる脆弱性に対抗する力ではなく人を成長させる過程として捉えるべきであるという指摘がされている。心理臨床場面においてもレジリエンスが発揮される過程を詳しく検討する必要性が出てきている。だが国内においては、レジリエンスという言葉は自尊心や家庭環境といった特定の要因との関係でのみ論じられることが多く、それが生まれる過程に焦点を当てた研究は非常に少ない。

以上のことから、本研究では、大阪市西成区の釜ヶ崎を出発点として現場からのレジリエンスの捉え直しを試みた。釜ヶ崎は、かつては日雇い労働のまち、今はさまざまな事情を抱えた单身男性が多く出入りするまちとして知られている。特に釜ヶ崎中心部で月 1 回開かれている「哲学の会」に着目し、会話の中から見られるレジリエンスを考察した。その際エスノグラフィーの手法によって、計 5 回の進行役を務めた筆者の立ち位置やポジショナリティの変容も分析した。その結果、自分を外に置いた客観的な研究を目的として会に入った筆者のポジショナリティの揺れと、そのような筆者を抱えながら漂う会の様子が明らかになった。「レジリエンス」というテーマで話し合った最終回では、筆者は参加者に巻き込まれ、時には助けられる存在になっていた。異物が入ってきてても緩やかに漂う場の力、脱力の力がそこには見られた。それこそが文献上からは描き出すことのできない、上に向かう力とは違うレジリエンスであると考えられた。現実の中でレジリエンスが生まれる過程を分析したことにより、レジリエンスを心理臨床に生かしていく上で必要な視点がいくつか示唆された。